

Visuddhimagga と Samantapāsādikā (2)

佐々木 閑

(本稿は「Visuddhimagga と Samantapāsādikā (1)」『佛教大学総合研究所紀要』、第4号、1979、pp. 35-63 の続きである。)

第四群

Smp p. 157, l. 8-p. 167, l. 28 : 宿住随念智および死生智の解説。

第三群は意地悪質問をした Verañja バラモンに対してブッダが自分の悟りの体験を説いて聞かせる言葉の中、初禪～第四禪の獲得に関する解説であった。そしてこの第四群は、その同じブッダの言葉において「四禪の到達」に続いて語られる「神通力の獲得」に対する注釈部分である。

ここで言うブッダの言葉とは全体が次のような内容になっている¹⁾。

- 1 四禪の到達
- 2 夜の初ヤーマに宿住随念智を獲得した。これが第一の明 (vidyā) である。
- 3 夜の中ヤーマに死生智を獲得した。これが第二の明である。
- 4 夜の後ヤーマに漏尽智を獲得した。これが第三の明である。

この四つの内容が Vinaya 本文において、ブッダの言葉として Verañja バラモンに対して語られるのである。そして Samantapāsādikā ではその言葉が逐語的に注釈

1) この教説は四禪→三明という仏教の基本的修行階梯を示している。この階梯の成立、発展は仏教思想を解明するうえで極めて重要な意味を持っており、榎本文雄によって詳細な研究がなされている。榎本文雄「仏教における三明 (tisso vijjā) の成立」『印度學佛教學研究』29 2, 1981, pp. 936-939 ; 同「初期仏典における三明の展開」『佛教研究』第12号, 1982, pp. 63-81。この論文には、同様の教説を説く資料が網羅的に紹介されている。榎本によると同じ修行階梯を語る資料でも、それがシャカムニ本人の体験として語られる場合と、仏弟子の修行道として語られる場合とでは成立の段階が異なっており、前者がもとになって後者が展開したという。本稿ではシャカムニ本人の体験としての四禪→三明を説く Vinaya の文章を Samantapāsādikā が注釈するに際して、仏弟子の修行道として提示された Visuddhimagga の文章を利用するという状況を考察しているわけであるから、成立段階の違いによって微妙にずれる二つの資料を Samantapāsādikā の作者がいかにして融合させたかを見ているということになる。

されていくわけだが、そこに Visuddhimagga の文章が多量に流用されているというわけである。1の「四禪の到達」を注釈する Samantapāsādikā の文章と、そこで利用されている Visuddhimagga との関係については第三群としてすでに論じた。禪の支分に関して両者に奇妙な食い違いが存在することは前稿で指摘したとおりである。ここで第四群として提示するのは2、すなわち「宿住随念智の獲得」に関する Samantapāsādikā の注釈箇所である。ここにも Visuddhimagga の文章が随分利用されている。以下その状況を詳しく見ていくことにする²⁾。

まず2の Vinaya 本文がどのようなものか提示しなければならない。

(2の Vinaya 本文)

A²: so evaṃ samāhite citte parisuddhe pariyodāte anāgaṇe vigatūpakkilese mudubhūte kammaniye ṭhite ānañjappatte pubbenivāsānussatiñāṇāya cittaṃ abhininnāmesim, so anekavihiṭṭaṃ pubbenivāsaṃ anussarāmi seyyath' idaṃ: ekam pi jātiṃ dve pi jātiyo tisso pi jātiyo catasso pi jātiyo pañca pi jātiyo dasa pi jātiyo vīsatiṃ pi jātiyo tiṃsaṃ pi jātiyo cattārīsaṃ pi jātiyo paññāsaṃ pi jātiyo jātiṣaṭṭhaṃ pi jātiṣaṭṭhaṃ pi jātiṣaṭṭhaṃ pi aneke pi saṃvaṭṭakappe aneke pi vivaṭṭakappe aneke pi saṃvaṭṭavivaṭṭakappe, amutrāsim evaṃnāmo evaṃgotto evaṃvaṇṇo evamāhāro evaṃsukhadukkhapaṭisaṃvedī evamāyupariyanto, so tato cuto amutra udapādim, tatrāp' āsim evaṃnāmo... evaṃsukhadukkhapaṭisaṃvedī evamāyupariyanto, so tato cuto idh' uppanno 'ti, iti sākāraṃ sauddesaṃ anekavihiṭṭaṃ pubbenivāsaṃ anussarāmi. ayaṃ kho me brāhmaṇa rattiyaṃ paṭhame yāme paṭhamā vijjā adhiḡatā avijjā vihatā vijjā uppannā tamo vihatō āloko uppanno yathā taṃ appamattassa ātāpino pahitattassa viharato. ayaṃ kho me brāhmaṇa paṭhamā abhinibbidhā ahosi kukkuṭacchāpakasseva aṇḍakosaṃhā. (Vinaya, III, p. 4, 1 17-36)

かの[私]は、このように心が入定し、完全に清浄となり、完全に清められ、汚点がなく、汚れを離れ、柔軟となり、活動に適し、安住し、不動となった時、心を宿住随念智に傾けた。かの[私は]種々の過去世の存在を思い出していった

2) 4の「漏尽智の獲得」についてついでに一言記しておく。この部分を注釈する Samantapāsādikā には Visuddhimagga の文章は使われていない。理由は単純で、4と対応するような記述が Visuddhimagga の中にないからである。したがって4を注釈する Samantapāsādikā が Visuddhimagga の文章を転用したくても利用できる文章がないのである。この4を注釈する Samantapāsādikā には Visuddhimagga とのパラレルはないのだが、Paramatthajotikā II と共通する箇所がかなり含まれている。Smp p. 168, 1. 19 から p. 169, 1. 6 まだが Paramatthajotikā II, PTS, Vol. I, p. 158, 1. 7-1. 23 と対応している。

のである。すなわち一つの生を、二つの生を、三つの生を、四つの生を、五つの生を、十の生を、二十の生を、三十の生を、四十の生を、五十の生を、百の生を、千の生を、一万の生を、多くの壞劫を、多くの成劫を、そして多くの壞成劫を思いだした。ある〔生においては〕これこれという名前で、これこれという氏族に属し、これこれの色をしており、これこれを食物とし、これこれの樂や苦を感受し、これこれの寿命を範圍としており、その〔私は〕そこで死んで〔別の〕ある生に生まれた。そこではこれこれという名前で乃至これこれの樂や苦を感受し、これこれの寿命を範圍としており、その〔私は〕そこで死んで、この〔現在の生に〕生まれたのだ、とこのように種々の過去世の存在を、〔その時の〕様子や呼び名ともども思い出したのである。バラモンよ、実にこれこそが私によって夜の最初のヤーマに獲得された最初の明であり、無明が追い払われて明が起こり、闇が追い払われて光明が生じたのである。それはちょうど、不放逸で精進に励み全力を傾けている者にそういったことが起こるのと同様である。バラモンよ、実にこれこそが鶏の雛が卵の殻を〔割ってでてくる〕かの如き、私による第一の破殻であった³⁾。

この Vinaya の本文に対する Samantapāsādikā の注は Smp p. 157, l. 8 から p. 162, l. 22 と、かなりの分量が費やされている。そしてその中に Visuddhimagga とパラレルな文章が度々現れることはすでに述べたとおりである。そこで次に Visuddhimagga の該当箇所を見ていくことにする。前稿でも述べたように Visuddhimagga では、ある事項について述べる場合、まず冒頭に内容をひとことで表現する「簡潔な文句」が提示され、続いてその文句を注釈していくかたちで「詳細な解説文」が展開される。ここで主題となっている宿住随念智は定修習の末尾、神通力の章で取り上げられている (Vism p. 410 から始まる)。そこでその部分に、宿住随念智に関する「簡潔な文句」を探してみると、これが見あたらない。410ページにそれがなければならぬのに全

3) この部分とパラレルな文が以下の阿含資料に存在する。Majjhimanikāya (=MN) No. 4 (Bhayaḥheravasutta), PTS, Vol. I, p. 22 (『増一阿含經』卷二十三の第一經, 大正二卷, 665b-667a に対応) ; MN No. 19 (Dvedhāvitakkasutta), PTS, Vol. I, p. 117 (『中阿含經』第一〇二經, 大正一卷, 589a-590a に対応) ; MN No. 36 (Mahāsaccakasutta), PTS, Vol. I, pp. 247-248 ; MN No. 85 (Bodhirājakumārasutta), PTS, Vol. II, p. 93 ; MN No. 100 (Sāṅgāravasutta), PTS, Vol. II, p. 212 ; Aṅguttaranikāya (=AN), Aṭṭhakanipāta XI, PTS, Vol. IV, p. 177. (『中阿含經』第一五七經, 大正一卷, 679b-680b に対応)。(ただし上文と完全に一致するのは AN, Aṭṭhakanipāta XI だけ。その他の資料は最後の「鶏の雛」の文章がない)。ここで挙げる資料は1から4までのすべての内容を含んでいるものであるから、本来ならば前稿中、第三群の考察を始めるに先だって提示すべきものであった。正確な資料提示を怠った私のミスである。

く存在せず、いきなり「詳細な解説文」から始まっているのである。しかしその「詳細な解説文」が何らかの元文に対する注釈の形で書かれていることは明らかである。たとえば出だしは “pubbenivāsānussatiñāṇākathāyaṃ pubbenivāsānussatiñāṇāyā ti pubbenivāsānussatimhi yaṃ ñāṇaṃ, tad atthāya.” 「宿住随念智の説において、宿住随念智のためにとは宿住随念に関する智のために [という意味である]」となっている。したがって「簡潔な文句」は存在しないのであるが「詳細な解説文」の方から遡れば容易にそれは復元できる。それは阿含の中で頻繁に見いだされる文句なのである。気付いた限りの箇所を挙げておく。DN No. 2 (Sāmaññaphalasutta), PTS, I, pp. 81–85 ; MN No. 27 (Cūḷahatthipadopamasutta), PTS, I, p. 182 ; MN No. 39 (Mahā-assapurasutta), PTS, I, p. 278 ; MN No. 51 (Kandarakasuttanta), PTS, I, pp. 347–348 ; MN No. 60 (Apaṇṇakasuttanta), PTS, I, p. 412 ; MN No. 65 (Bhaddālisuttanta), PTS, I, p. 441 ; AN 一法の58, PTS, I, 164⁴⁾。

Visuddhimagga が「簡潔な文句」を書かなかった理由は不明である。仏教者なら誰でも知っている有名な言葉ということで省略したのであろうか。ともかく、それが書いてなくても、書いてあるかの如くにその後の「詳細な解説文」が続いていくのであるから、ここではその「簡潔な文句」を提示しておく必要がある。(訳は先にだした Vinaya 本文のものを参照のこと)

B²: so evaṃ samāhite citte parisuddhe pariyodāte anaṅgaṇe vigatūpakkilese mudubhūte kammaniye t̥hite ānejjappatte pubbenivāsānussatiñāṇāya cittaṃ abhinīharati abhininnāmeti, so anekavihiṭṭaṃ pubbenivāsaṃ anussarati seyyath' idam: ekam pi jātiṃ dve pi jātiyo tisso pi jātiyo catasso pi jātiyo pañca pi

4) ここにあげた資料と注3で挙げた資料がどのような関係にあるのか念のために注記しておく。Vinaya 本文はシャカム＝自身が四禪と三明を獲得した体験を語るものである。そしてこれとパラレルな文を持つのが注3で挙げた資料である。したがってこれらの資料はすべてシャカム＝自身を主語として悟りの階梯が語られている。一方 Visuddhimagga は修行者のためのマニュアルであるから、主語は不特定の修行者である。つまり「彼は～を獲得する」といったスタイルで書かれているのである。宿住随念智（およびその次の死生智）を説明する際、Visuddhimagga は「簡潔な文句」を省略してしまっているので特定の經典の文句が直接引用されているわけではないが「詳細な解説文」からみて明らかに何らかの經典の文句を念頭において書かれていることがわかる。その文句というものは「彼は～を獲得する」という、三人称を主語とした文章になっているはずである。同じ四禪→三明という修行階梯を語ってはいても、注3で挙げた資料とは違って主語が三人称になっている、そういう經典の文章をベースにして Visuddhimagga は書かれているのである。それがここで挙げた DN No. 2 (Sāmaññaphalasutta) などの資料というわけである。なおこれらの資料の漢訳対応箇所は次のとおり。DN No. 2 (『寂志果経』, 大正一卷, 275c), MN No. 65 (『中阿含経』第一九四「跋陀利經」, 大正一卷, 748a)。その他は対応漢訳がなかったりあるいは四禪→漏尽智という形になっていて宿住随念智や死生智が抜けているなどして対応部分がない。

jātiyo dasa pi jātiyo vīsaṭṭi pi jātiyo tiṃsaṃ pi jātiyo cattārīsaṃ pi jātiyo paññāsaṃ pi jātiyo jāṭisaṭṭi pi jāṭisaḥassaṃ pi jāṭisatasahassaṃ pi aneke pi saṃvaṭṭakappe aneke pi vivaṭṭakappe aneke pi saṃvaṭṭavivaṭṭakappe, amutrāsīṃ evaṃnāmo evaṃgotto evaṃvaṇṇo evaṃāhāro evaṃsukhadukkhapaṭisaṃvedī evaṃāyupariyānto, so tato cuto amutra udapādim, tatrāp' āsīṃ evaṃnāmo... evaṃsukhadukkhapaṭisaṃvedī evaṃāyupariyānto, so tato cuto idh' uppanno 'ti, iti sākāraṃ sauddesaṃ anekavihiṭṭaṃ pubbenivāsaṃ anussarati.

①～④の下線部は Vinaya の文章と相違する箇所である。

① : Vinaya では欠 (AN 一法の58も欠)

② : Vinaya では abhininnāmesīṃ

③ : Vinaya では anussarāmi

④ : Vinaya では anussarāmi

さらに Vinaya 本文ではこのあとに次の文が続いていたがここにはない。「バラモンよ、実にこれこそが私によって夜の最初のヤーマに獲得された最初の明であり、無明が追い払われて明が起こり、闇が追い払われて光明が生じたのである。それはちょうど、不放逸で精進に励み全力を傾けている者にそういったことが起こるのと同様である。バラモンよ、実にこれこそが鶏の雛が卵の殻を「割ってでてくる」かの如き、私による第一の破殻であった」(ayaṃ kho me brāhmaṇa rattiyā paṭhame yāme paṭhamā vijjā adhigatā avijjā vihatā vijjā uppannā tamo vihato āloko uppanno yathā taṃ appamattassa ātāpino pahitattassa viharato. ayaṃ kho me brāhmaṇa paṭhamā abhinibbidhā ahosi kukkuṭacchāpakasseva aṇḍakosamhā)。この文章は修行階梯がシャカムニ自身の体験として語られるときのみ意味を持つものであるから、対象が修行者一般である場合には不必要なものである。ここにでてこないのは全く当然である。

この B² は上で挙げた Sāmaññaphalasutta や Cūlahatthipadopamasutta, Mahā-asapurasutta などの經典に共通して説かれるものであるから、そのうちどれか一つを出典として特定することはできない。これらに共通して現れる B² という文章を念頭において、すなわち「簡潔な文句」として、ブッダゴースは Visuddhimagga を書いた、と結論づけるのが妥当であるように思える。しかし実はブッダゴースがベースにしたのは Sāmaññaphalasutta であると特定できるのである。この部分だけ見ていたのでは分らない。Visuddhimagga の神通力に関する章全体の構成をみてみよう。それは次のような順序で語られる。

- I 神変 (iddhi)
- II 天耳界 (dibbasotadhātu)
- III 他心智 (cetopariyañāna)
- IV 宿住随念智 (pubbenivāsānussatiñāna)
- V 死生智 (cutūpapātañāna)

そしてこの五種の神通力がすべて同じスタイル、すなわち実際には書かれていない「簡潔な文句」を念頭においたうえで、その語句を逐語的に注釈していくというスタイルで解説されていくのである。このうちのIVについて今みてきたわけだが、そこで想定されていた「簡潔な文句」の出所が *Sāmaññaphalasutta* や *Cūḷahatthipadopamasutta*, *Mahā-assapurasutta* などであった。ところで *Visuddhimagga* には上のように宿住随念智意外にも四つの神通力が全く同じスタイルで説かれているのであるから、ブッダゴーサが「簡潔な文句」として念頭においていたテキストには I から V までの神通力が、この順番で説かれていたはずである。そのような資料を探してみると *Sāmaññaphalasutta* しかないのである。その他の *Cūḷahatthipadopamasutta* や *Mahā-assapurasutta* などとはどうかというと、四禅→宿住随念智→死生智→漏尽智という内容になっていて神変や天耳界、他心智は説かれていない。したがって *Visuddhimagga* がベースにしたのは *Sāmaññaphalasutta* であったことが決定されるのである⁵⁾。

さて以上で *Vinaya* 本文および *Visuddhimagga* の「簡潔な文句」(あくまで仮想上のものであるが)の提示を終わった。次に *Vinaya* を注釈する *Samantapāsādikā* の文章を *Visuddhimagga* の「詳細な解説文」と対応させながら見ていくことにする。

Samantapāsādikā のこの箇所での *Visuddhimagga* の引用状況はいささか複雑になっている。*Visuddhimagga* の特定の箇所を丸ごと持ってきて利用するのではなく、利用すべき部分を適宜切り取ってきて、うまく繋ぎ合わせることで全体を構成しているのである。そこでまず初めに、そのパッチワークの各部分を一覧で示し、そのあとで各引用部分および繋ぎの部分に関してコメントしていくことにする。宿住随念智を注釈する *Samantapāsādikā* の文中 (p. 157, l. 8–p. 162, l. 22) での *Visuddhimagga* の

5) *Sāmaññaphalasutta* では四禅と神変の間に智見 (*nānadassana*) と意所成の身を化作すること (*mañomayaṃ kāyaṃ abhinimmina*) が説明されているが *Visuddhimagga* では欠落している。*Visuddhimagga* では四禅は地遍修習の章で、神変を初めとした神通力は神通修習の章で、とそれぞれが別個の箇所で説明されるのであるが、その間に挟まるべき智見と意所成の身の化作は無視されているといことになるわけである。ただし意所成の身の化作は神変修習の一部に組み込まれた形で説明されている。

引用箇所は次のとおりである。

- ① Smp p. 157, l. 9-p. 158, l. 15 = Vism p. 376, l. 28-p. 378, l. 2
- ② Smp p. 158, l. 17-l. 31 = Vism p. 410, l. 27-p. 411, l. 5
- ③ Smp p. 159, l. 11-p. 160, l. 7 = Vism p. 414, l. 3-l. 32
- ④ Smp p. 160, l. 7-p. 161, l. 29 = Vism p. 422, l. 6-l. 35 ; p. 423, l. 4-8 ; p. 411, l. 10-l. 32

①における注意点

○ ①は Samantapāsādikā の場合 Vinaya-A² の冒頭における次の文句に対する注釈となっている。(Visuddhimagga ではそれが Sāmaññaphalasutta の中の同一文に対する注釈となっていることは先述のとおり)

かの〔私〕は、このように心が入定し、完全に清浄となり、完全に清められ、汚点がなく、汚れを離れ、柔軟となり、活動に適し、安住し、不動となった時
so evaṃ samāhite citte parisuddhe pariyodāte anaṅgaṇe vigatūpakkilese mudubhūte kammaṇiye ṭhite ānañjappatte

①の出だしは「かの〔私〕は」という句の注釈であるが Visuddhimagga が「そこにおいて彼のとは彼の、第四禪に到達したヨーギンである (tattha so ti so adhi-gatacatutthajjhāno yogī)」としているのに対して Samantapāsādikā では「そこにおいて彼のとは彼の私である (tattha so ti so ahaṃ)」となっている。私とはシャカムニ自身を指す。Visuddhimagga は修行者のためのマニュアルであり、一般則としての修行方法を説明するのであるから動作者は確かにヨーギンである。しかし Vinaya の文章はシャカムニが Verañja バラモンに向かって自分の悟りの体験を語るものであるから、主体はシャカムニ自身である。したがって Visuddhimagga の文をそのまま持ってくることはできない。Samantapāsādikā はそれを正しく「彼の私である」と訂正している。Visuddhimagga から Samantapāsādikā への文章の移動に際して、きちんとした気配りがなされていたことが分かる。

○ Visuddhimagga p. 376, ll. 30-31 の「初禪の獲得などを経て (paṭhamajjhānādhigamādinā)」という句が Samantapāsādikā では抜けている。(Smp p. 157, l. 10)

○ 続く「このように心が入定し」の中の「心」という語に関して Visuddhimagga は「心がとは色界心がである (citte ti rūpāvacaracitte)」と注釈しているのに対し Samantapāsādikā はこの文を欠く。(Vism p. 376, l. 33)

○ ①と②を並べて見るとすぐ気がつくことだが、①と②は Samantapāsādikā で

は連続しているのに、それに対応する Visuddhimagga の文章は30ページ以上も離れた場所へジャンプしている。この理由について述べておく。すでに上で言ったが、Visuddhimagga は神通力の章において五つの神通力の獲得方法を次の順番で解説していく。

- I 神変
- II 天耳界
- III 他心智
- IV 宿住随念智
- V 死生智

Sāmaññaphalasutta の記述に従ったからである。一方 Samantapāsādikā の方は Vinaya 本文 (A²) の記述順序に沿って注釈が展開する。すなわち

初禅→二禅→三禅→四禅→宿住随念智→死生智→漏尽智

という順番である。したがって Visuddhimagga の中の神変、天耳界、他心智に関する説明は Samantapāsādikā にとっては不要のものであり利用する機会はないということになる。ところが I～V の「簡潔な文句」つまり実際は書かれていないが Visuddhimagga の作者が念頭に置いていた Sāmaññaphalasutta の文句は同一パターンの繰り返しになっており、冒頭部分は皆同じ文章になっている。ということはその冒頭部分に対する「詳細な解説文」は I の神変のところで一旦だしておけば、II～V に関しては省略ということになる。実際 Visuddhimagga はそうしているのである。一方 Samantapāsādikā の方は四禅に続いて IV の宿住随念智から注釈を始めるわけであるが、冒頭部分に対する注釈を Visuddhimagga から借用しようとする、当然それは I の神変の説明文から引っ張ってくることになる。そこにしか冒頭部分に対する「詳細な解説文」はないからである。こうして冒頭の定型句に対する注釈は Visuddhimagga の神変の箇所を転用して、続いていよいよ宿住随念智そのものを説明する記述に対して注釈しようとする、それは Visuddhimagga の IV 番目、宿住随念智の箇所から持ってくることになる。こうして Visuddhimagga の引用部分が大きくジャンプすることになるのである。したがって言うまでもなく①が冒頭定型句への注釈であり②からは宿住随念智の注釈が始まるのである。

②における注意点

○ ①と②の間に Samantapāsādikā 独自の繋ぎの文章が入っている (Smp p. 158, ll. 16-17)。「宿住随念智のためには、以上のようにして神通の基礎となるその心が

生じてきたとき (*pubbenivāsānussatiñāṇāyā* ‘ti evaṃ abhiññāpāda ke jāte etasim citte)」ここまでが繋ぎの文で、これに続いて「宿住随念に関する智を目的にして、である (*pubbenivāsānussatimhi yaṃ ñāṇaṃ tadatthāya*)」という文句がくるが、ここからは Visuddhimagga の転用である (Vism p. 410, l. 26)。つまり Samantapāsādikā は宿住随念智の注釈を始めるにあたって、それが「神通の基礎となる心が生じてきたとき」に初めて可能になるというコメントを独自に加えているのである。これは前稿の末尾で示したように初禅～四禅の定修習が神通の基礎になるという Samantapāsādikā 独自の主張を踏まえたものである。

○ 断路者 (*chinnavaṭṭamaka*) は他人の識によっても宿住随念することが可能だという主張のあとに Visuddhimagga では「それらは諸仏にのみ可能である (*te buddhānaṃ yeva labbhanti*)」とあるが、この文だけが Samantapāsādikā では欠落している (Vism p. 410, ll. 31-32 ; Smp p. 158, l. 23)。この欠落に何かの意味があるかどうかは不明。

○ ②は Vinaya 本文の「心を宿住随念智に傾けた。かの〔私は〕種々の過去世の存在を思い出していったのである。すなわち (*pubbenivāsānussatiñāṇāya cittaṃ abhininnāmesim, so anekavihiṭaṃ pubbenivāsaṃ anussarāmi seyyath’ idam*)」という文の注釈であるが、この中、「傾けた (*abhininnāmesim*)」という語の注釈部分に関して Visuddhimagga と Samantapāsādikā の間に違いが見られる。Samantapāsādikā ではこれを「傾けたとは向けたのである (*abhininnāmesin ti abhiharim*)」と注釈しているのであるが、これが Visuddhimagga の対応箇所には存在しない (Smp p. 158, l. 27 ; Vism p. 411, l. 2)。つまり Visuddhimagga では②の中に「傾けた」という語に対する注釈が存在していないのに、それを転用してきた Samantapāsādikā は転用した段階で上のような一文を挿入したということになる。これには合理的な理由がある。繰り返すが①および②は Samantapāsādikā の場合、Vinaya-A² の冒頭にある次の句に対する注釈である。

I so evaṃ samāhite citte parisuddhe pariyodāte anaṅgaṇe vigatūpakkilese mudubhūte kammaniye thite ānañjappatte II pubbenivāsānussatiñāṇāya cittaṃ abhininnāmesim, so anekavihiṭaṃ pubbenivāsaṃ anussarāmi seyyath’ idam

I かの〔私は〕は、このように心が入定し、完全に清浄となり、完全に清められ、汚点がなく、汚れを離れ、柔軟となり、活動に適し、安住し、不動となった時、心を宿住随念智に傾けた。かの〔私は〕種々の過去世の存在を思い出して
II ったのである。すなわち

①は下線部Ⅰに対する注釈であり、②は下線部Ⅱに対する注釈となっている。ところで Visuddhimagga では①が神変に関する解説の箇所にあるのに対して②は30ページ以上も離れた宿住随念智のところに置かれていることはすでに指摘した。理由も述べた。Visuddhimagga では冒頭の定型句つまり下線部Ⅰと全く同文の Sāmaññaphalasutta の文句を注釈する際に、神通力の第一番「神変」のところでそれをすでに済ませてしまっているため四番目の宿住随念智のところではもう言わない。しかし Samantapāsādikā では四番目の宿住随念智から注釈が始まる訳だから、冒頭部分の注釈にあたっては Visuddhimagga の神変の箇所から、その該当する文章を転用してこななければならない。それに対して、定型句が終わって宿住随念智そのものに注釈をつける段階になると、それは Visuddhimagga の宿住随念智の箇所から文章を借用してくることになる。それゆえ Visuddhimagga の引用箇所がジャンプするのである。ところで今問題になっている abhininnāmesim という語の場所に注目してみる。それは下線部Ⅱにあるのだから冒頭の定型句ではなく、宿住随念智独自の記述に含まれているようにみえる。それならばこの語に対する注釈文は Visuddhimagga の場合、宿住随念智のところに存在しているはずであるから、それを借用してくればよいということになる。しかしそれが存在していないのである。存在しているなら Visuddhimagga の②に含まれていなければならない。それがいないから、Samantapāsādikā が②を転用する際に新たに一文挿入しなければならなかったわけである。なぜないのかというと、この abhininnāmesim という動詞は定型句の一部だからである。Sāmaññaphalasutta の五種の神通力における定型句は「彼は心が入定、清浄などの状態になった時～[という神通力に]心を傾ける」というパターンになっており、「～」の部分に五種の神通力が順次入っていく。したがって「傾ける」という語は「～」の後ろに来てはいるが定型句の一部なのである。ということは、この「傾ける」という語は当然、Visuddhimagga においては定型句を注釈する箇所、すなわち神通力の第一番、神変を説明する箇所ですでに注釈済みということになる。そして実際そのとおり、Visuddhimagga 神変の章 (p. 384, ll. 14-15) においてちゃんとこの語は注釈されているのである。

傾けるとは、獲得されるべき神変に傾斜し神変に重きを置くことである。

abhininnāmeti ti adhigantabba-iddhipoṇaṃ iddhipabbhāraṃ karoti.

それならば Samantapāsādikā は、この文章を転用すればよいはずである。しかし Samantapāsādikā はそうしない。この文章を使わず独自に「傾けたとは向けたのである (abhininnāmesin ti abhiharim)」という別の文を作って挿入している。Saman-

tapāsādikā は Visuddhimagga の文章を使うことができないのである。なぜならそこには iddhi (神変) という語が含まれているからである。「傾ける」という語は「～」の後ろにきている。したがって「簡潔な文句」を逐語的に注釈していく Visuddhimagga では、まず「～」の注釈がきてそのあとに「傾ける」の注釈がくることになる。そして神通力の第一番は神変であるから「～」として神変を詳しく注釈し、そのあとに「傾ける」の注釈がくる。そのため「傾ける」の注釈文の中に既に注釈済みの「神変 (iddhi)」という語がごく自然に使われることになる。しかしこれをそのまま Samantapāsādikā が宿住随念智の注釈として使うことができないのは言うまでもない。そこで Visuddhimagga の文章は使わず、文脈に合うよう独自の注釈を創作して挿入したというわけである。Samantapāsādikā の作者が Visuddhimagga を丹念に見た上で細かい配慮をしながら文章を組み立てていった状況が読みとれる。

○ Samantapāsādikā では上記の「傾けた」の注釈の直後に「かの〔私は〕(so)」を注釈する次の文が続くが、それは Visuddhimagga にはない独自の文である (Smp p. 158, ll. 27-28)。

かのとはかの私である

so ti so ahaṃ

ここでの「かの (so)」は Vinaya-A² で二度目に現れる方の so である。最初の so についてはすでに注釈がすんでいる。Samantapāsādikā ではそれを「そこにおいて彼のとは彼の私である (tattha so ti so ahaṃ)」と注釈するし Visuddhimagga の対応部分では「そこにおいて彼のとは彼の、第四禪に到達したヨーギンである (tattha so ti so adhigatacatutthajjhāno yogī)」としていることはすでに指摘した。違いの理由も述べた。最初の so をこのように注釈しておけば再び so が現れてももう注釈する必要はないはずである。だから Visuddhimagga ではもう注釈はしない。ところが Samantapāsādikā の方は、一度注釈しているにもかかわらず再度しかも同内容の注釈を繰り返す。いささかしつこい感じがする。あくまで推測であるが Visuddhimagga の文章を転用してきた Samantapāsādikā の作者が、ここででてくる so は Visuddhimagga のように不特定の修行者を指すのではなく、あくまでシャカムニ自身のことなのだという点を強調しようとして（故意か無意識かは分からないが）同じ注釈を繰り返したのではないかと考える。

②と③の中間部分における注意点

○ ②は Vinaya-A² の中、「心を宿住随念智に傾けた。かの〔私は〕種々の過去世

の存在を思い出していったのである。すなわち云々 (pubbenivāsānussatiñāṇāya cittaṃ abhininnāmesim, so anekavihiṭaṃ pubbenivāsaṃ anussarāmi seyyath' idaṃ)」を注釈しているわけだが、そのうち pubbenivāsaṃ の部分までは上記のように幾分の食い違いはあるものの大枠として Visuddhimagga の文章を利用している。ところが次の anussarāmi seyyath' idaṃ を注釈する段になると Visuddhimagga を離れて独自の言葉で注釈をつける。それが②と③の中間部分になるのである (Smp p. 158, l. 31-p. 159, l. 11)。anussarāmi および seyyath' idaṃ を Samantapāsādikā は次のように注釈する。

思い出していくとは一つの生、二つの生というようにして生の順番を次第次第にたどって思い起こし、或いはあとになってから心を傾けた瞬間に思い起こすということを示している。最高の状態を完成したマハーブルンシャ達には準備段階というものが無いから、彼らは心を傾けるだけで思い出すことができるが、初心者の善男子達は準備をしてから思い起こすのだから、彼らのために準備段階について説明すべきではあるが、それを説明しようとする律の導入が過大なものになってしまうので説明しない。知りたい者は Visuddhimagga で説かれる文によって知るがよい。ここでは聖典の注釈だけをしておこう。すなわちそれはとは「思い出すことを」始めた者の「過去の生の」種類を示すための不変化詞である。彼によって「思い出され」はじめた過去の生の種類「すなわち」区別を示そうとして「一つの生」云々と言ったのである。

anussarāmi ti ekam pi jātiṃ dve pi jātiyo ti evaṃ jātipaṭipātiṃ anugantvā anugantvā sarāmi, anudeva vā citte abhininnāmitamatte eva sarāmīti dasseti. pūritapāramiṇaṃ hi mahāpurisānaṃ parikkammakaraṇaṃ n' atthi, tena te cittaṃ abhininnāmetvā 'va saranti, ādikammikakulaputtā pana parikkammaṃ katvā saranti, tasmā tesam vasena parikkammaṃ vattabbaṃ siyā, tam pana vuccamānaṃ atibhāriyaṃ vinayanidānaṃ karoti tasmā taṃ na vadāma. atthikehi pana Visuddhimagge vuttanayena gahetabbaṃ, idha pana pāliṃ eva vaṇṇayissāma. *seyyathīdan* ti āraddhappakāradassanatthe nipāto. ten 'eva yv āyaṃ pubbenivāso āraddho tassa pakāraṃ pabhedam dassento ekam pi jātīn ti ādim āha.

これは注釈と言うより、詳しい説明を Visuddhimagga に譲る理由を語る文章である。もちろんこの部分が Visuddhimagga → Samantapāsādikā という成立順序を示す強力な証拠の一つになっていることは言うまでもない。ではその Visuddhimagga では、この部分はどのように解説されているのであろうか。「思い出していく (anus-

sarati)」は Visuddhimagga の p. 411, 1. 6 から p. 413, 1. 37 にわたって解説される。もちろん神通力の第四番目、宿住随念智の章である。確かに分量が多い。これをこのまま引用したのでは Samantapāsādikā が言うように注釈は過大なものになってしまうであろう。省略したのも無理はない。ところでその内容は Samantapāsādikā の言うとおり、初心者が初めて宿住随念智を起こすための具体的な修行方法になっている⁶⁾。ところがそこに書かれているのはそれだけではないのである。初心者の修行方法が説かれるまえに別のトピックがとり上げられている。それはひとくちに宿住随念つまり「過去の生を思い出す」とはとっても外道や声聞、仏といった境地の違いによって、その思い出し方に優劣の差があるという話なのである。そして奇妙なことに、この話は Samantapāsādikā において「Visuddhimagga で説かれる文によって知るがよい」の一言で省略されてしまうかのように見えながら、実はもっとあとのところでちゃんと引用されているのである。あとのところとは④の最後の箇所である (Smp p. 161, 1. 15-1. 29)。ここは宿住随念智というものの説明がすべて終了したあとの一種のまとめとして書かれている箇所であり、しかもいよいよ奇妙なことに、それはただの引用ではなく、Visuddhimagga の説を一部変更するかたちで引用されているのである。(どのように変更されているかは後述)。もう一度まとめると状況は次のようである。Visuddhimagga では神通力の第四番目、宿住随念智の章において「簡潔な文句」の中の「思い出していく (anussarati)」という語に関してかなり多量の注釈をつける。その内容は大きく二つに分かれており、前半は外道や声聞、仏といった境地の違いによって過去生の思い出し方に優劣の差があるという話、後半は初心者が初めて宿住随念智を起こすための具体的な修行方法である。一方 Samantapāsādikā では同じ「思い出していく (anussarāmi)」を注釈するに際して、この Visuddhimagga の文章を転用することはせず「初心者のための準備段階について知りたい者は Visuddhimagga で説かれる文によって知るがよい。」と説明を Visuddhimagga に譲ってしまう。ところがここよりもあと、宿住随念智のまとめにあたる箇所で、省略したはずの Visuddhimagga の文章のうちの前半部文つまり声聞や仏による思いだし方の違いを語る文が引用され、しかもそれは Visuddhimagga の本来の意味を変更するかたちでアレンジされているというわけである。ここで「初心者の準備段階について知りたい者は Visuddhimagga を見よ」という Samantapāsādikā の言葉が気にかかる。Samantapāsādikā が説明を Visuddhimagga に譲っているのは初心者の準備段階だけ

6) 佐々木閑「神通力の獲得方法」『禅學研究』72号, 1994, pp. 1-16。

なのである。声聞、仏による思いだし方の違いの説明まで譲っているわけではない。だからそれがあとになって引用されていても不合理ではない。しかしそれならそれをわざわざあとの部分へ持ってこなくても今ここで、すなわち「思い出していく (anusarāmi)」を注釈する箇所です引用すればよいのではないか。そうせずに宿住随念智のまとめにあたる箇所へ持っていったのは、それが何か特別な重要性を持つからではないかと思われる。Visuddhimagga とは違う説を主張する重要部分でありそれゆえ敢えて区切りとなる箇所に置いたのではないだろうか。正確なことは分からないが、いずれにしろこの部分は Visuddhimagga と Samantapāsādikā を比較する際の注目すべきポイントの一つである。

③における注意点

③は Vinaya-A² の次の文に対する注釈である。

「一つの生を、二つの生を、三つの生を、四つの生を、五つの生を、十の生を、二十の生を、三十の生を、四十の生を、五十の生を、百の生を、千の生を、一万の生を、多くの壊劫を、多くの成劫を、そして多くの壊成劫を思いだした。」

ekam pi jātiṃ dve pi jātiyo tisso pi jātiyo catasso pi jātiyo pañca pi jātiyo dasa pi jātiyo viṣatiṃ pi jātiyo tiṃsaṃ pi jātiyo cattārisaṃ pi jātiyo paññāsaṃ pi jātiyo jātisataṃ pi jātisahasassaṃ pi jātisatasahasassaṃ pi aneke pi samvattaṅkappe aneke pi vivattaṅkappe aneke pi samvattavivattaṅkappe,

注釈の内容は主に劫 (kappa) の説明にあてられており、劫を単位とする世界の生成・消滅のサイクルが細かく語られる。注目すべき相違点は次の二点である。

○ 幾つかの護呪經典の名が列挙されるが、その中 Visuddhimagga で Ratanasutta と呼ばれるものが Samantapāsādikā では Ratanaparitta になっている⁷⁾。(Vism p. 414, l. 24 ; Smp p. 159, l. 31)

○ ③の末尾に違いがある。③では三種の仏国土を紹介し、その中の一つ命令国土 (āṇākkhetta) の消滅に際しては、必ずその国土全体と一緒に生成し一緒に消滅すると語る。ここまでは Visuddhimagga と Samantapāsādikā は同文である。そしてこの部分が③の末尾となる。Visuddhimagga ではそのあとに「その消滅と生成は次のよ

7) Ratanasutta は本来 Suttanipāta の一部 (vv. 222-238) であるが独立に護呪經典として用いられることが多い。G. Bongard-Levin, D. Boucher, F. Enomoto, T. Fukita, H. Matsumura, C. Vogel, K. Wille, *Sanskrit-Texte aus dem buddhistischen Kanon: Neuentdeckungen und Neueditionen III*, Göttingen 1996, pp. 30-37.

うであると理解せよ (tass' evaṃ vināso ca saṇṭhahanaṃ ca vedittabbam)」と言って、世界の消滅、生成の有様を延々と語る (PTS 版で 7 ページ以上。Vism p. 414, l. 31-p. 422, l. 5)。一方 Samantapāsādikā ではこれを省略し、「その消滅と生成は Visuddhimagga で説かれているから知りたい者はそれによって知るがよい (tassa vināso ca saṇṭhahanaṃ ca Visuddhimagge vuttaṃ, atthikehi tato gahetabbam)」と言って説明を Visuddhimagga に譲ってしまう (Smp p. 160, ll. 5-7)。Visuddhimagga の分量の多さから考えてごく自然な処置であろう。

④における注意点

Visuddhimagga は③のあとに世界の消滅、生成に関する詳細な描写があり、Samantapāsādikā はそれを省略してしまう。このような違いはあるものの、ともかく両者ともにここで「一つの生を云々」という文に対する注釈を終了し、次の文句に対する注釈へと移る。④である。Samantapāsādikā の場合、④は Vinaya-A² の中の次の文句に対する注釈である。

ある[生においては]これこれという名前で、これこれという氏族に属し、これこれの色をしており、これこれを食物とし、これこれの楽や苦を感受し、これこれの寿命を範囲としており、その[私は]そこで死んで[別の]ある生に生まれた。そこではこれこれという名前で乃至これこれの楽や苦を感受し、これこれの寿命を範囲としており、その[私は]そこで死んで、この[現在の生に]生まれたのだ、とこのように種々の過去世の存在を、[その時の]様子や呼び名ともども思い出したのである。

amutrāsīṃ evaṃnāmo evaṃgotto evaṃvaṇṇo evamāhāro evaṃsukhadukkhapaṭisaṃvedī evamāyupariyanto, so tato cuto amutra udapādiṃ, tatrāp' āsīṃ evaṃnāmo... evaṃsukhadukkhapaṭisaṃvedī evamāyupariyanto, so tato cuto idh' uppanno 'ti, iti sākāraṃ sauddesaṃ anekavihiṭṭaṃ pubbenivāsaṃ anussarāmi.

○ この文句を注釈するに先立って Samantapāsādikā は次のような導入句を冒頭に持ってくる。

またこの説かれた消滅と生成、菩提道場において正等覚を目のあたりに悟るために座っていた世尊は、そのうちの多くの壊劫、多くの成劫、多くの成壊劫を思い出したのである。どのようにか。私はある[生に]においては[これこれという名であった]云々というやり方である。

ye pana te saṃvaṭṭavivattā vuttā, etesu bhagavā bodhimaṇḍe sammāsa-

bodhim abhisambujjhanatthāya nisinno aneke pi samvattakappe aneke pi vivattakappe aneke pi samvattavivattakappe sari. katham. amutrāsīn ti ādinā nayena. (Smp p. 160, ll. 7-11)

修行者の一般則を語る Visuddhimagga と違って、Samantapāsādikā はシャカムニ自身の体験としての宿住随念智の獲得を注釈しているわけだから、それを明確にすべく、このような文章を注釈として組み込むのは当然の処置といえる。しかしこれは Visuddhimagga の文脈には適合しない。Visuddhimagga にはこのような文が現れるはずがない。何か別の形になっているはずである。Visuddhimagga の対応部分は次のようである。

そして劫を思い出そうとする比丘は、過去の生を思い出そうとして、それらの劫のうちの多くの壊劫、多くの成劫、多くの成壊劫を思い出すのである。どのようにか。私はある〔生に〕においては〔これこれという名であった〕云々というやり方である。

pubbe-nivāsaṃ anussaranto pi ca kappānussaraṇako bhikkhu etesu kappesu aneke pi samvattakappe aneke pi vivattakappe aneke pi samvattavivattakappe anussarati. katham. amutr' āsīn ti ādinā nayena. (Vism p. 422, l. 6-1. 9)

両者と違っている部分は下線で示した。Visuddhimagga では行為主体はシャカムニではなく修行比丘になっている。本来そうになっていた Visuddhimagga の文章を、Vinaya の注釈として使えるように、Samantapāsādikā が行為者をシャカムニに変えたのである。

○ 「これこれという名前で、これこれという氏族に属し (evamñāmo evamgotto)」を注釈する際、Visuddhimagga では例をだして「これこれという名前とはティッサとかプッサであり、これこれという氏族とはカッチャーナとかカッサパである (evamñāmo ti Tisso vā Phusso vā. evamgotto ti Kaccāno vā Kassapo vā)」と言う (Vism p. 422, ll. 12-13)。これに対して Samantapāsādikā では同じく例をだすが、その名前が違っている。「これこれという名前とはヴェッサンタラとかジョーティパーラであり、これこれという氏族とはバग्ガヴァとかゴータマである (evamñāmo ti Vessantaro vā Jotipālo vā. evamgotto ti Bhaggavo vā Gotamo vā)」(Smp p. 160, ll. 13-14)。これは言うまでもなく Visuddhimagga の一般的な名称を Samantapāsādikā がシャカムニ自身の過去世の名称に取り替えたのである。

○ 上に続いて「これこれの色をしており、これこれを食物とし、これこれの楽や苦を感受し、これこれの寿命を範囲としており」という句の注釈になるが Visud-

dhimagga はそれを次の文で始める。

もしまたその時の自分の色の具合、窮乏・安楽といった生活状態、あるいは楽・苦の多さ、短命・長寿といった状態を思い出したいと思うなら、それを思い出す。それゆえこれこれの色をしており乃至これこれの寿命を範囲としておりと言うのである。そこにおいてこれこれの色とは白とか褐色であり、これこれの食物とは米、肉、飯とか転がった果実といった食物である。

sace pana tasmim kāle attano vaṇṇasampattiṃ vā lūkhapaṇitajivikabhāvaṃ vā sukhadukkhabahulaṃ vā appāyukadīghāyukabhāvaṃ vā anussaritukāmo hoti, tam pi anussarati yeva, ten' āha evaṃ vaṇṇo... evaṃ āyupariyanto ti. tattha evaṃ vaṇṇo ti odāto vā sāmo vā. evaṃ āhāro ti sālimamsodanāhāro vā pavattaphalabhojano vā. (Vism p. 422, ll. 14-20)

一方 Samantapāsādikā は下線部がなく、'evaṃ vaṇṇo ti' から始まる。Samantapāsādikā が下線部分を省いた理由は不明。シャカムニ個人の体験として、下線部に何らかの不都合があるのであろうか。

○ このあと Vinaya の本文に沿って注釈が続く。「これこれの楽や苦を感受し」「これこれの寿命を範囲としており」「その〔私は〕そこで死んで〔別の〕ある生に生まれ」「そこではこれこれという名前で乃至これこれの楽や苦を感受し、これこれの寿命を範囲としており」といった句に関する注釈であるが、この間 Visuddhimagga と Samantapāsādikā は同文である (Vism p. 422, ll. 20-33 ; Smp p. 160, ll. 16-29)。ところがそのあと「その〔私は〕そこで死んで、この〔現在の生に〕生まれたのだ (so tato cuto idh' uppanno)」という句になると、とたんに Samantapāsādikā は Visuddhimagga を離れて独自の注釈を始める。なぜなら Samantapāsādikā の場合、「この現在の生」とはシャカムニの現在の生であり、それはすなわちマーヤー夫人の体内に宿ったカピラ城の王子としての特定の生を指すことになるから、修行者一般の「現在の生」として注釈する Visuddhimagga の文章とは合わないからである。Visuddhimagga の一般則としての注釈文 (Vism p. 422, l. 33-p. 423, l. 4) を除去して Samantapāsādikā は代わりにシャカムニ個人の前世および現在の生について語る。すなわち直前の生においてはトゥシタ天の Setaketu という天子であって、その諸天とともにひとつの氏族 (gotta) を形成し、身体は黄金色、食物は天食 (dibbasudhāhāra) を食べ、天の楽を感受し、苦は行苦のみを受け、寿命は五十七億六千万歳であったというのである。それがそこで死んでマハーマーヤー王妃の体内に生じたという (Smp p. 160, l. 29-p. 161, l. 9)。Visuddhimagga を最大限利用しながらも、

変更すべきところは確実に変更していく Samantapāsādikā の編纂方針がよく現れている。

○ 「[その時の] 様子や呼び名ともども」の注釈部分。呼び名の例として Visuddhimagga はカッサパ族のティッサ (Tisso Kassapo) という名を挙げるが, Samantapāsādikā ではそれがゴータマ族のティッサ (Tisso Gotamo) に変わっている (Vism p. 423, l. 6 ; Smp p. 161, l. 11)。おそらくシャカムニが過去世においてカッサパ族に属していたことはないという認識から, それをゴータマ族に変えたのではないと思われる。

○ 上記「[その時の] 様子や呼び名ともども」の注釈をもって一応④は終了するのであるが, Samantapāsādikā ではこのあとに外道や声聞, 仏といった境地の違いに応じて思い出し方に違いがあるという話が語られる (Smp p. 161, l. 13-29)。このトピックの特異性についてはすでに「②と③の中間部分における注意点」のところで指摘した。Samantapāsādikā は Visuddhimagga の文章を利用するのであるが, その際 Visuddhimagga の説を若干修正する形にアレンジしている。その状況を詳しく見ていくことにするが, まず Visuddhimagga ならびに Samantapāsādikā の該当部分全文を提示する。文中の下線部分は Visuddhimagga と Samantapāsādikā に共通する部分, つまり Samantapāsādikā が Visuddhimagga の文章をそのまま利用した箇所を示す。

Vism p. 411, l. 8-412, l. 14.

実にこの過去の生を思い出すのは六種の人である。外道, 普通の声聞, 大声聞, 第一声聞, 独覚, ブッダである。そのうち外道たちは四十劫を思い出すのみであり, それ以上は「思い出せ」ない。なぜか。慧の力が弱いからである。というのは彼らは名と色の区別がないため慧が弱いのである。普通の声聞は慧が強いので百劫でも千劫でも思い出す。八十人の大声聞は十万劫を思い出す。二人の第一声聞は一阿僧祇と十万劫を「思い出す」。独覚は二阿僧祇と十万劫を「思い出す」。そこまでが彼らの意向だからである。一方諸仏には限界というものがない。そして外道たちは蘊の連続をたどって思い出す。彼らは「蘊の」連続をたどらずに死と結生によって思い出すことはできない。盲人が自分の望む場所に近づいていくことがないのと同様である。またたとえば盲人たちが杖を離すことなく歩くように, 彼らは蘊の連続を離れることなく思い出すのである。普通の声聞は蘊の連続をたどっても思い出すし, 死と結生によって進んでいくこともある。八十人の大声聞も同様である。一方二人の第一声聞は蘊の連続をたどることがない。あ

る身体の死を見て[その生の]結生を見、さらに別の死を見て[その生の]結生を[見る]という具合に死と結生によってのみ進んで行くのである。独覚も同様である。一方諸仏は蘊の連続をたどることも死と結生によって進むということもない。というのは彼らにとっては幾千万劫のうちの後の方であれ前の方であれ、望む場所が明瞭になっているからである。云々

imam hi pubbe nivāsaṃ cha janā anussaranti; titthiyā pakatisāvakā mahāsāvakā aggasāvakā paccekabuddhā buddhā ti. Tattha titthiyā cattālisam yeva kappe anussaranti, na tato paraṃ. kasmā. dubbalapaññattā; tesam hi nāmarūpaparicchedavirahitattā dubbalā paññā hoti. pakatisāvakā kappasatam pi kappasahassam pi anussaranti yeva balavapaññattā. asīti mahāsāvakā satahasassa kappe anussaranti. dve aggasāvakā ekam asankheyyam satahasassa ca. paccekabuddhā dve asankheyyāni satahasassa ca, ettako hi tesam abhinīhāro. buddhānam pana paricchedo nāma n' atthi. titthiyā ca khandhapaṭipātīm eva saranti, paṭipātīm muñcitvā cutipaṭisandhivasena saritum na sakkonti; tesam hi andhānam viya icchitappadesokkamanam n' atthi. yathā pana andhā yaṭṭhim amuñcitvā va gacchanti, evam te khandhānam paṭipātīm amuñcitvā va saranti. pakatisāvakā khandhapaṭipāṭiyā pi anussaranti cutipaṭisandhivasena pi sankamanti, tathā asīti mahāsāvakā. dvinnam pana aggasāvakānam khandhapaṭipāṭikaccam n' atthi, ekassa attabhāvassa cutim disvā paṭisandhim passanti, puna aparassa cutim disvā: paṭisandhin ti evam cutipaṭisandhivasen' eva sankamantā gacchanti; tathā paccekabuddhā. buddhānam pana neva khandhapaṭipāṭikiccam na cutipaṭisandhisankamanakiccam atthi, tesam hi anekāsu kappakoṭisu hetthā vā upari vā yam yam thānam icchanti, tam tam pākaṭam eva hoti.

このあともう少し外道、声聞といった立場の違いによる思い出し方の相違が語られ、そのあと初学者が宿住随念を習う際のトレーニング方法が語られる。そこは Samantapāsādikā には全く転用されないので問題としない。問題は上の Visuddhimagga の文章を Samantapāsādikā がどのようにアレンジして利用しているかという点にある。Samantapāsādikā の対応部分を提示する。

Smp p. 161, ll. 13-29

では諸仏だけが過去の生を思い出することができるのかというなら、[それは次のように] 説かれている。諸仏だけではない。独覚も仏の声聞も外道も[思い出

すのである。が] 全く同じというわけではない。外道たちは四十劫を思い出すのみであり、それ以上は[思い出せ]ない。なぜか。慧の力が弱いからである。というのは彼らは名と色の区別がないため慧が弱いのである。一方声聞の場合、八十人の大声聞は十万劫を思い出す。二人の第一声聞は一阿僧祇と十万劫を[思い出す]。独覚は二阿僧祇と十万劫を[思い出す]。そこまでが彼らの意向だからである。一方諸仏には限界というものがない。望む限り思い出せるのである。そして外道たちは蘊の連続をたどって思い出す。彼らは[蘊の]連続をたどらずに死と結生によって思い出すことはできない。盲人が自分の望む場所に近づいていくことがないのと同様である。声聞は[この]両方のやり方で思い出す。独覚も同様である。一方諸仏は蘊の連続をたどることでも、死と結生によって進むということによっても、獅子の跳躍によっても、幾千万劫のうちの後の方であれ前の方であれ、あらゆる望む場所を思い出すのである。

kim pana buddhā eva pubbenivāsaṃ sarantīti. vuccate, na buddhā yeva, paccekabuddhabuddhasāvakatitthiyāpi no ca kho avisesena, titthiyā hi cattālīsaṃ yeva kappe saranti na tato paraṃ. kasmā. dubbalapaññattā; tesam hi nāmarūpaparicchedavirahato dubbalā paññā hoti. sāvakesu pana asītimahāsāvakā sataṣaḥassaṃ saranti, dve aggasāvakā ekam asaṅkheyyaṃ sataṣaḥassaṃ ca, paccekabuddhā dve asaṅkheyyāni sataṣaḥassaṃ ca; ettako hi tesam abhinīhāro, buddhānaṃ pana paricchedo n' atthi, yāva icchanti tāva saranti, titthiyā ca khandhapaṭipāṭiṃ eva saranti paṭipāṭiṃ muñcivā cutipāṭisandhivasena saritum na sakkonti, tesam hi andhānaṃ viya icchitapadesokkamaṇaṃ n' atthi; sāvakā ubhayathāpi saranti, tathā paccekabuddhā buddhā pana khandhapaṭipāṭiyāpi cutipāṭisandhivasena pi sihokantavasena pi anekāsu kappakoṭṭisu heṭṭhā vā upari vā yaṃ yaṃ ṭhānaṃ ākaṅkhami taṃ sabbam saranti yeva.

Visuddhimagga では冒頭で過去の生を思い出すことのできる人として「外道、普通の声聞、大声聞、第一声聞、独覚、ブッダ」の六種を挙げる。この部分を Samantapāsādikā は利用しない。なぜなら Samantapāsādikā は過去生を思い出せる人を六種には分けないからである。Samantapāsādikā ではそれが五種になっている。外道、八十人の大声聞、二人の第一声聞、独覚そして諸仏の五種である。Visuddhimagga にある「普通の声聞」が省かれている。これが Samantapāsādikā の単純ミスによる欠落でないことは明らかである。上記二種の文章を比べてみれば Visuddhimagga 中

で、普通の声聞も過去生を思い出すことができると言明する部分を Samantapāsādikā がすべて抜き取っていることがわかる。まず今言ったように冒頭部分の六種の分類を利用しない。次にその六種の一々を説明する文章中、普通の声聞に関する部分だけを利用しない。(「普通の声聞は慧が強いので百劫でも千劫でも思い出す」)。そしてさらに思い出し方の違いを示す部分で普通の声聞の思い出し方を語る部分を見捨てる。(「普通の声聞は蘊の連続をたどっても思い出すし、死と結生によって進んでいくこともある」)。その結果 Samantapāsādikā では、普通の声聞が宿住随念智を持っているという主張は完全に除去されることになる。Samantapāsādikā を素直に読めば、宿住随念智を持っているのは声聞の中でも八十人の大声聞と二人の第一声聞という、特定の人物達だけになってしまうのである。この改変と直接関係があるかどうかははっきりしないが、Samantapāsādikā はそれぞれの人達の思い出し方の違いに関して Visuddhimagga と食い違う説を主張する。Visuddhimagga に従えばそれは次のようである。

| | | |
|---------|-------|---------------|
| 外道 | ————— | 蘊の連続を辿る |
| 普通の声聞 | ————— | 蘊の連続 & 死と結生 |
| 八十人の大声聞 | ——— | 蘊の連続 & 死と結生 |
| 第一声聞 | ————— | 死と結生 |
| 独覚 | ————— | 死と結生 |
| 諸仏 | ————— | 好きな場所を自在に思い出す |

それが Samantapāsādikā では次のように変わっている。

| | | |
|---------|-------|-----------------------------|
| 外道 | ————— | 蘊の連続を辿る |
| (普通の声聞 | ————— | 欠) |
| 八十人の大声聞 | ——— | 蘊の連続 & 死と結生 |
| 第一声聞 | ————— | 蘊の連続 & 死と結生 |
| 独覚 | ————— | 蘊の連続 & 死と結生 |
| 諸仏 | ————— | 蘊の連続 & 死と結生 & 好きな場所を自在に思い出す |

この違いがどうして生じてきたのかははっきりした理由は分らない。普通の声聞に関する記述を除去したために全体の構造にひずみが生じてこのような形になったのかもしれないが、それだけではないはずである。第一声聞、独覚、諸仏の能力がこのように変更されねばならない何らかの積極的理由があったのではないかと推測されるが詳細は不明である。

さてここで『解脱道論』を見てみる。前稿でも Visuddhimagga と Samantapāsādikā に大きな食い違いがある時、『解脱道論』が重要な情報を与えてくれた。禅定の支分のところである。そこでは Samantapāsādikā が Visuddhimagga の説を変えて独自の説に直していたが、その新たな説が『解脱道論』に一致したのである。ここも同じく Samantapāsādikā が Visuddhimagga と違う説をだしてきている。したがってそれを『解脱道論』の説と比べる作業が必要となるのである。

今問題になっている箇所と対応する文章は『解脱道論』巻九にある。その原文と和訳は次のとおり。(大正卷三十二, 444a³⁻¹²)

憶宿命智七種。小大不應説過去内外内外。於過去已所得道果或國或村當憶。彼成過去想憶宿命智。從智憶陰相續。憶宿命智。從此外道憶四十劫。過彼不能憶。身無力故。聖聲聞憶一萬劫。從此最大聲聞。從彼最大緣覺。從彼如來正遍覺。自他宿命及行及處一切。餘唯憶自宿命。少憶他宿命。正遍覺隨其所樂憶一切。餘次第憶。正遍覺若入三昧。若不入三昧。若不入三昧常憶餘唯入三昧。

憶宿命智には七種ある。小・大・不應説・過去・内・外・内外である⁸⁾。過去において獲得した道果や国や村を思い出すのである。過去の想を生み出すのが憶宿命智である。智によって陰の相続を思い出すのが憶宿命智である。これにより外道は四十劫を思い出す。それ以上は身が無力なため無理である。聖声聞は一萬劫を思い出す。最大の声聞はそれ以上である。そして最大の縁覚はそれ以上であり、如来正遍覚はさらに上である。〔如来正遍覚は〕自他の宿命および行および處の一切を〔思い出す〕。他の〔者〕は自分の宿命だけを思い出すのであり他の宿命に関しては少し思い出すだけである。正遍覚は一切を思いのままに思い出すことができる。他の〔者〕は順番に思い出していく。正遍覚は三昧に入っている時しか〔思い出すことができない〕。

全体が Visuddhimagga や Samantapāsādikā に対応するわけではないが、この中の外道から如来にいたるそれぞれの段階の人の思い出す能力を比べる箇所が重要な比較対象となる。それによると分類は外道、聖声聞、最大の声聞、最大の縁覚、如来正遍覚の五種である。したがって分類の数から言うと Visuddhimagga ではなく Samantapāsādikā に一致する。Visuddhimagga では声聞を「普通の声聞」「大声聞」「第一声聞」の三種に分けていたが Samantapāsādikā は「普通の声聞」を除去して

8) 宿住随念智の分類は visuddhimagga p. 433-434 において詳しく解説されている。

「大声聞」「第一声聞」の二つだけを取り上げていた。そのため分類の数が六から五に減ったのである。『解脱道論』は声聞を「聖声聞」と「最大の声聞」の二種に分ける。このうち「最大の声聞」というのは「第一声聞」のことと理解して間違いないだろう。すると問題になってくるのは「聖声聞」の原語である。まず最初に浮かぶ可能性は ariyasāvaka という形である。これはニカーヤや論書などに多出する語で一般には預流果以上のレベルに達した比丘を指す。Visuddhimagga でもそのような意味で使われている⁹⁾。その場合それは「普通の声聞」とも「八十人の大声聞」とも厳密には一致しないが、少なくとも「特別な声聞にのみ宿住随念智が起る」という意味では Samantapāsādikā の主張と一致することになる。

次に「聖声聞」が Visuddhimagga, Samantapāsādikā で言うところの「普通の声聞 (pakatisāvakā)」あるいは「大声聞 (mahāsāvakā)」のいずれかの訳である可能性についても考えておく。

| Vism | Smp | 『解脱道論』 |
|-------|------|--------|
| 外道 | 外道 | 外道 |
| 普通の声聞 | (欠) | (聖声聞?) |
| 大声聞 | 大声聞 | (聖声聞?) |
| 第一声聞 | 第一声聞 | 最大の声聞 |
| 独覚 | 独覚 | 最大の縁覚 |
| 諸仏 | 諸仏 | 如来正遍覚 |

「普通の声聞」の普通 (pakati) という語が「聖」と訳されるとは思えないので、もし『解脱道論』が普通の声聞のことを「聖声聞」と訳すのなら、聖という語は声聞の何か特別の段階を指す言葉ではなく、声聞という存在そのものに対する尊称ということになる。つまり「聖声聞」の原語が単に sāvaka である可能性を考えているのである。もしそれなら『解脱道論』が声聞について語る際にはいつでも「聖声聞」という訳語を用いるであろう。そこで『解脱道論』の中に現れる声聞の語を拾い集めてみた。

- 1, 大正二十三卷, 401c¹⁰ 「聲聞於梵行之初堅戒上戒」
- 2, 同 401c¹³ 「復次有二種戒。謂無犯戒清浄戒。云何無犯。謂聲聞戒」
- 3, 同 407c¹⁹ 「復次定有四種。有定是佛所得非聲聞所得。有定聲聞

9) Vism p. 226ff, 294.

所得非佛所得。有定是佛所得及聲聞所得。有定非佛所得非聲聞所得。」

- | | | |
|-------|--------------------|---|
| 4, 同 | 428a ¹² | 世尊による世間の饒益のひとつ「已安聲聞住聲聞法」 |
| 5, 同 | 432a ²³ | 念死修行の一節「復次先聲聞有大智慧有大神通有大神力。舍利弗目犍連等。彼入死法。」 ¹⁰⁾ |
| 6, 同 | 434c ²⁷ | 十念のまとめにおける一節「若一声聞修行功德。此謂修念僧。」 |
| 7, 同 | 435a ²⁵ | 慈の修行法「復次如是當觀。我名聲聞 _{云々} 」 |
| 8, 同 | 435b ²² | 同じく慈の修行法「我名聲聞。今實名聲聞」 |
| 9, 同 | 438a ¹² | 「於聲聞人」 |
| 10, 同 | 443b ⁵ | 天耳通の説明「於是得聲聞自在聞千世界聲。從彼緣覺最多。如來聞無數。」 |

これらの箇所には Visuddhimagga に対応がないためパーリ語との比較はできない。しかし聖声聞という語が一度も現れないことから、聖声聞が単なる sāvaka の訳である可能性は低い。『解脱道論』は sāvaka を聖声聞とは訳さないのである。そうすると「聖」は何か特別な語の訳であると思われる。10に注目する。ここでは天耳通の及ぶ範囲として声聞、縁覺、如来という三者の違いを示しており、今問題にしている宿住随念の範囲を示す記述と同類の文形となっている。sāvaka, paccekabuddha, buddha (あるいは tathāgata か) がそれぞれ声聞、縁覺、如来と訳されているのである。声聞がさらに細分化されているわけではないので原語は単に sāvaka となっていたであろう。それが声聞と訳されている。聖声聞とはなっていない。これに対して宿住随念では外道、聖声聞、最大の声聞、最大の縁覺、如来正遍覺という分類になっているのだから、聖声聞の「聖」、最大の声聞の「最大」は声聞を区分するための何らかの原語を訳したものと考えざるを得ない¹¹⁾。そして Visuddhimagga, Saman-tapāsādikā を見る限り、それに相当する語はそれぞれ mahāsāvaka, aggasāvaka しもあり得ないのである。そして aggasāvaka (第一声聞) が最大聲聞にあたることは間違いないと思われるので、mahāsāvaka に対応するのが「聖声聞」ということになるのである。そうすると『解脱道論』は宿住随念を行える者を外道 (titthiya), 聖聲聞 (mahāsāvaka), 最大聲聞 (aggasāvaka), 最大縁覺 (paccekabuddha, 縁覺?), 如来正遍覺 (buddha) に分類しているということになる。そしてこれもまた Saman-

10) 対応文が Visuddhimagga p. 233-234 にあるが、そこには「声聞」の語は存在しない。

11) 最大の縁覺というのは agga-paccekabuddha と想定されるが縁覺には最大も最小もないか

tapāsādikā の説に合致することになる。「聖声聞」の原語が ariyasāvaka であれ mahāsāvaka であれ、『解脱道論』の記述は Visuddhimagga ではなく Samantapāsādikā に近いものとなるのである。

前稿で示した四禪の支分にしても、今調査した宿住随念智にしても、Samantapāsādikā が Visuddhimagga の説を変える場合『解脱道論』の説と一致するかたちに変えている。これが何を意味するのか皆目不明であるが、非常に奇妙でしかもブッダゴースア研究において何らかの重要性を持つ事実であることは間違いないであろう。

Samantapāsādikā ではこのあと A² の最後の文章に対する注釈がくる。つまり「バラモンよ、実にこれこそが私によって夜の最初のヤーマに獲得された最初の明であり、無明が追い払われて明が起こり、闇が追い払われて光明が生じたのである。それはちょうど、不放逸で精進に励み全力を傾けている者にそういったことが起こるのと同様である。バラモンよ、実にこれこそが鶏の雛が卵の殻を「割ってでてくる」かの如き、私による第一の破殻であった」という文章の注釈である。この文は Visuddhimagga の簡潔な文句 (B²) には存在しないものであるから、当然それに対する「詳細な解説文」も存在しない。したがって Samantapāsādikā が Visuddhimagga の文を転用することもない。ここは Samantapāsādikā 独自の文となる。

(前稿で、論文全体を二回に分けて発表すると言ったが紙数が足りなくなってしまった。この続きは何らかのかたちで発表するつもりである。)